

刊行にあたって

京都府立大学文学部歴史学科では、京都府下を中心に、地域の歴史や文化遺産に対する研究をおこない、その成果を文化遺産叢書として 2008 年度以来公刊してきた。

その第 37 集となる本書は、科学研究費「公儀触による両領国（徳川・国持外様）体制の最終検証と触研究への情報提供あり方研究」の成果の一部をまとめたものである。

本書は、天保 13 年 (1842) において公儀（「幕府」）から出された触（公儀触）の伝達の全国的な調査報告、調査の過程でご教示いただいた方々からのご寄稿、今後の公儀触研究に資するための情報提供あり方の研究、地域・資料・歴史への思いが綴られたコラムからなっている。

この時代は、「幕府」と各地の「藩」によって、政治的な支配権力が分有され、地方分権的であるとともに実質上は中央集権的な国家体制（「幕藩体制」）とされる。かつてはこの体制の研究は活発に行われたが、近年は行われていない。その理由は定かではないが、長年戦争がなく、人口が増加して 3 千万人といわれるこの社会は、現代の私たちにとって何らかの参考になる点があるのではないだろうか。

この社会の理解には公儀触伝達のあり方が参考になる。全国に向けて出された公儀触の伝達は、当時の社会の構造（機構、論理等）によっているからである。また触は政権者の意志を具現したものである。

当時の社会体制は、「幕藩体制」と紹介したが、当時の用語を使うと「大公儀・公儀体制」といえるものである。この「公儀」の研究も近年は行われていないが、そこから出された公儀触の伝達の解明から「公儀」が明らかにでき、当時の社会の理解につながるのではないかと考えるところである。

公儀触伝達の研究は、はじまったばかりであるが、本書が参考になれば幸いである。

今回の調査においては、全国各地の方々からご教示、ご協力をいただいた。今後も調査を継続して行っていきたいと考えているのでご支援をお願いしておきたい。

京都府立大学文学部歴史学科